慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三隈治雄著「日本舞踊史の研究」
Sub Title	Haruo Misumi : A history of Japanese Dancing
Author	西村, 亨(Nishimura, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.26, (1968. 11) ,p.83- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00260001-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三隅治雄著「日本舞踊史の研究」

西村　亨

著者の三隅治雄さんが故折口信夫門下として、師承の芸能史を専攻されるようになってから、もう二十年を越えるであろう。三隅さんが芸能に志を定めたのはおそらく学生時代からのことであろうが、以来ほとんど迷うことなく、この道一筋に進んで来られた。わたしなども同門のよしみで、三隅さんのしごとには特別親近な気持を持ち続けて来たし、その書かれるものから啓発され刺戟されることが多かった。今日、民俗芸能に関して、その実際を目に見、調査研究していることにかけて、三隅さんと肩を並べ得る人はおそらくいないであろう。それほど、三隅さんはまめに丹念に日本全国を歩き回って、知識の袋をこやし続けて来られた。

実は、非常に素朴な感想として言えば、わたしなどは未だに民俗芸能に対する場合、一種奇妙なとまどいから抜け切れないのが常である。芸能を文字に書かれた作品と比較するのはおかしなことかも知れないが、われわれが文学作品に対する場合には、ほとんど何の苦労もなしに作品の位置づけが頭の中でなされているのに比して、芸能の場合には、それがそれほど自然には行なわれないのではないだろうか。芸能を演ずる人のある動作なら動作の持つ意味が、直ちにわれわれの頭の中に調和をもって納まって来ない。そういうことが、わたしに奇妙なとまどいを起こさせるのだと思う。これがわたしだけのことかどうか、人に聞いてみたこともないが、わたしの芸能に対する不勉強を告白しているようなものだ。しかし、一面、芸能の学問の歴史が浅く、まだその組織が十分に整っていないことも

事実であろう。

そういう意味からは、三隅さんのこの本は大変啓蒙的な効果を持っている。その面ばかりが高く評価されることは三隅さんの本意ではないかも知れないけれど、芸能の雑然とした印象がこの本を読み進んでゆくうちに気持よく整理されてゆくのを感じた。

この本には「歌舞伎舞踊とその源流」というサブタイトルが付けられているが、「舞踊史概観」という要領を得た小文を巻頭に置いて以下、翁・獅子・道成寺もの・曽我もの、あるいは変化舞踊・物売りの舞踊というように歌舞伎舞踊の主だったレパートリイを取り上げ、また念仏踊りとの関係、出端と道行の問題、乱拍子や六法・採り物をめぐる問題など、歌舞伎舞踊のテクニックの面からいくつかの際立った要素を取り上げ、それらを民俗芸能とのつながりにおいて、あるいは比較対照において解説しようと試みている。今日の歌舞伎舞踊は舞台芸術として長年洗練されてきたものであるが、それがいわば氷山の水面上の一角であって、その根底において、日本人の民俗的な生活と深くかかわり合っている。そのこと自体は今日少しも目新しい提言ではないが、この本では、それがいかに根深いものであるかということよりも、それがいかに展開して来たかを、個々の問題について具体的に解明することに主眼が置かれている。芸能の学問の発達の上からも、着実に一歩が進められたものと言うことができよう。

わたしはこの本を通じて、初めて三隅さんの文章のうまさを感じさせられた。それはこの本の組織によるのでもあろうが、各章を予定した枚数で解説しようという計画が表現を練ることになったのであろうか、今度の本でははしきりに文章のうまさを痛感させられた。ひとつだけ例を上げるが、翁に関する章において、異郷から来る遠来の神が男女一対の姿をとることを説いている個所がある。それは能の高砂の尉と姥の姿などに代表されるのであるが、そういう舞台の翁のことから一転して、話は民俗芸能の翁へと移ってゆく。ちょうどアップしていたカメラが退いて行くように視野が拡大されてゆくのである。それは、この章ばかりでなく、他の章にも用いられている効果的な技法であるが、この翁の章では、話が民俗芸能の翁・媼に移るとともに、その翁・媼は「じじ」と「ばば」という民俗のにおいの濃いことばに置き換えられている。さりげない文章の中に、そういう用語についても著者の周到な配慮がなされているのである。

しかし、あまりに流麗な文章の調子が、逆に文章を読み流してしまう危険をもらはんでいる。文章の調子に乗って大切な問題点をうっかり読み過ごすことになりそうなのである。再び翁の章を例に取るならば、民俗芸能を裏付けにして見ると翁が神であること、能の翁の中にあるエロティックな要素が何に基づくかということ、黒い翁から昇華したのが白い翁であることなど、すなおに納得させられる。しかし、この章を読み終わってふり返ってみると、能の翁が「今日の御祈禱なり」というように祝福を奉ることをする。なぜ遠来の神が祝福を奉るのか、だれに向かってそれが演ぜられているのかそういう疑問のいくつかが未解決のままに残されていることに気付く。つまり、ここで三隅さんが解説しようとしていることと、その次に解明されなければならない問題とが、著者にも読者にも、もっとはっきり示されることが必要なのではあるまいか、そういう危惧を感じさせられるのである。

この本に取り上げられた問題は、どれを取っても、それひとつでじゅうぶん一冊の研究書をなすに足るほどの大きな問題である。この本で広い展望を与えられた三隅さんが、この次にはそういうひとつの問題を徹底的に追求されることをわたしは期待している。